

A-7. 身近な生き物とのかかわり(A子と幼虫の事例) はまなす幼稚園(北海道札幌市) (4歳児 6月上旬~8月)

昨年度、幼児を取り巻く自然環境を見直し、整理した。今年度はそれを保育に活用しながら、その際の教師の援助や友達など人とのかかわりで、幼児はどのように心を動かし、その心が豊かになっていくのかを実践事例を通して探っていった。

(□環境 ○幼児の姿 ☆見取り、教師の願い →援助)



身近な虫を見たり触れたりできるように、キャベツやブロッコリーの苗を、幼児と一緒に植える。

6月上旬~ 幼虫がいた!

- ブロッコリーに幼虫がたくさんいるのをA子が発見。友達と夢中になって採り始める。「こんなにいたよ。」とペットボトルに入れた幼虫を大喜びで教師に見せに来る。「すごいね。何の幼虫かな。幼稚園で飼ってみようか。」と提案してみるが、「いいの。A子のだから、おうちに持って帰る。」

☆ 自分で見つけた物を持ち帰りたというA子の気持ちを受け止めていきたい。
→ A子の興味、思いを家庭でも受け止め、持ち帰った幼虫を大事に育てて欲しいと願い、降園時に、母にもA子の嬉しい気持ちや、幼虫が食べそうな葉を知らせる。

その後も幼虫採り は続く

- ペットボトルにたくさん集めることが楽しい様子。ペットボトルには少量の水が入っていて、水に浸されて弱っている幼虫もいる。家に持って帰る日もあれば遊んでいるうちに死んでしまった日もあるが、他の遊びをしているときも大切に持ち歩き、A子なりに大事にしている。

☆ もう少し大事に扱ってほしいと願い、一緒に幼虫を見ながら、「水が入っていると弱ってしまうんじゃないかな。」などと話してみるが、とにかく、『いい物を見つけた!』という気持ちが強く、弱っていることなどには、あまり気持ちが向かないようだ。A子がこんなにたくさんの幼虫と触れ合ったのは初めてのようだ。まずは、十分にA子なりに幼虫とかわる経験を見守っていこう。

一週間後~ 幼稚園で飼って みる!

- 家に持って帰った幼虫を幼稚園で飼うと持って来る。家ではなかなかうまく育てられないことから母と話して決めたようだ。さっそく、教師と一緒に飼育ケース、葉っぱ、枝などを用意し、幼虫を育てることを始める。A子も家からキャベツを持ってきて、毎朝、葉っぱを取り替えたり幼虫の様子を観察したりする。母も毎朝A子と一緒に幼虫の様子を見るが続く。

☆ 十分に幼虫とかわったことで、徐々に幼虫の様子(すぐに死んでしまう。弱ってきているなど)に関心が向いていったのだろう。母も関心をもってかわり、話し合ってくれたことでA子も納得することができたのでは。A子の幼虫への関心や育てる気持ちが続いて欲しい。また、育てる中で、色々なことを発見し感じて欲しいと願う。

→ 毎朝、A子と一緒に世話をし、母にも積極的に幼虫の様子を伝えていくようにする。また、他の幼児も身近な虫に関心をもってもらいたいと思い、幼虫がいる場所や様子などをできるだけ話題にする。

何だろう?これ。見て見て。紐みたいなものが出ています。色が違うね。黒いのと白いのがあるよ。

どうしてかな。毎日、キャベツをあげているのに、あまり大きくならないね。死んじゃった幼虫もいるよ。キャベツは嫌いなのかな。ブロッコリーなら食べるかな。

徐々に関心を持って みる幼児も増えて くる

- 毎日、観察しかかわる中で、幼児なりにいろいろ発見したり、不思議に感じることもあり、子供たちの中でも話題になっている。やがて、全ての幼虫がさなぎになる。

7月～ 蝶になった！

☆ 初めて見る生態の変化に、知識ではなく、幼児なりに色々な発見や驚きを感じることを大事にしたいと考え、「ほんとだ。」「不思議だね。」など、幼児と一緒に驚いたり考えたりしていくようにした。さなぎになったときは、もうすぐ蝶になることをワクワクしながら待てるように、さなぎの中で蝶になる準備をしていることを話す。幼虫は見たことがあるけど、さなぎを見るのは初めての幼児は、このとき初めて「何これ!？」と興味をもつ。さなぎの中で生きていることが分かるように、さなぎが動く様子を見せたりする。

○ ある日、2匹のさなぎが蝶になっているのを発見。気が付いたA子も大喜び。教師はみんなに知らせてあげようと思い、しばらくそのままにしておくことを提案するが、いつの間にか、A子は飼育ケースから逃がしてあげていた。その後も、次々に羽化していった。飼育ケースの中に手を入れて我先にとつかみたい幼児もいて、羽がちぎれて飛べない蝶も出てくる。

☆ 今までのA子だったら、蝶を捕まえて家に持って帰ると言っていたかもしれないが、すぐに逃がしてあげようと思ったことに大きな気持ちの変化を感じた。

○ さなぎの抜け殻には、必ず赤っぽい物が付着していることに気が付き、何人かの幼児は、さなぎから出る時に血が出るんだと話している。ある日、羽化したばかりで、まだ羽がぐったりとしている蝶に気が付く。産まれたばかりであることを伝え、A子を含め数人の幼児が、ベランダの外に飼育ケースを持っていき、空に飛んでいくまでふたを開けたまま触らずに、ずっと蝶を見守っていた。

その後のA子のエピソード

- 2、3日後、年長児が土の上に落ちた幼虫を捕まえず困っている様子を側で見ていたA子は、「私がやってあげる。」と、幼虫をつかまえてプロッコリ一の葉に乗せてあげていた。
- 2学期。再びプロッコリに付いている幼虫を、B子が手にたくさんとって握り締めているのを見て、A子は「かわいそうだよ。」と声をかけていた。

考 察

- 小さな虫にも命があることに気が付いて欲しいと願うが、身近な生き物に関心を持ち、十分に触れたり見たりする経験や、育てる前にまずは虫と遊ぶ経験が幼児期には大切で、そのような経験が、身近な生き物にも興味や親しみをもったり、命があることに気が付き、大切にしようという気持ちにつながっていくのではないかな。そのためにも、虫が自然に住める場所を確保したり、身近な生き物に興味をもった幼児の姿を見過ごさずに、幼児の素朴な疑問や気持ちを大切に、より興味をもって観察したり試したりする気持ちをもてるような教師の援助も必要である。
- A子の場合、母も、A子の好奇心を受け止め、一緒に関心をもってかかわってくれたことで、世話をする気持ちも持続していった。幼児だけでは、なかなか生き物を育てる気持ちが持続していかないことも多いが、生き物の姿に関心を持ち続け、世話を継続していけるように環境を工夫し、大人が支えていくことが必要なのではないか。

ポイント

子どもが自分なりに、生き物とかかわり、感じていくことができるように待ちの姿勢で見守る保育者の援助があります。生きものを自分で育てることを通して愛おしさを感じたり、「命」を子どもが徐々に実感していく姿が見えます。